

第192回定期演奏会をちょっと予習

開催中止となった191回定期にて配布予定でした予習を掲載いたします

指揮者なしのオーケストラが生む音楽をお楽しみいただいている本日……に続きまして、秋の涼風も楽しみみな次回定期(9月23日)では、我々が常任指揮者・マエストロ角田鋼亮が細やかな音楽づくりを導きます(本日の豊かな演奏経験もアンサンブルのさらなる美しさにきっと生きるでしょうから、そこにもご注目を!).

そして次回定期もまた、ぜひ生演奏で体感していただきたい……と強くお勧めしたい理由があります。幻の名コンチェルトの登場——これほど美しいのに音楽史の影に隠れてしまったピアノ協奏曲が、華麗な復活を遂げるのです。20世紀前半にかけて大人気を博した、モシユコフスキのピアノ協奏曲ホ長調です。

なにしろ、9月定期の機会を逃すとこの先、ホールで聴ける機会があるだろうか?というくらい、演奏機会の稀な作品ですけれど、お聴きになると「なぜ幻」になっていたんだろう?と魅せられるはず。たいへんな超絶技巧のピアノ独奏には、この珍しい作品を「いつか絶対演奏したい」と、なんと中学生の頃から(!)思い続けてきたという名手・阪田知樹さん(名古屋生まれ)をお迎えします。

もっと愛されるべき幻の名曲を、長年あたためてきた深い愛と共に、弾く。この代えがたい瞬間を、ぜひ一緒に。

◆必聴! ピアニストの愛が遂に実る、モシユコフスキの壮麗

そのモシユコフスキですが、「あれ?」とご記憶が蘇るかたもいらっしゃるでしょう。セントラル愛知交響楽団がマエストロ角田鋼亮をお迎えした出発のとき——2019年4月22日(角田鋼亮 常任指揮者就任記念コンサート)(於:愛知県芸術劇場コンサートホール)で、角田さんは最初にモシユコフスキの組曲《世界中の国々から》という(これまた珍しい)作品をおいていたのです。

これは、さまざまな時代・国々やスタイルの作品をご紹介していこう……という角田さんの想いもこめた選曲でした。ロシアやイタリア、ドイツ、スペイン、ポーランド、ハンガリー……と、モシユコフスキが各地の音楽を愉しく模した《世界中の国々から》の演奏は(ラフマニノフ〈交響曲第2番〉の熱演とともに)CD化されていますので[オクタヴィア OVCL-00701]あらためてお聴きいただくとして。

そんなマエストロ角田の想いは、定期演奏会シリーズの秀逸で多彩な選曲にも反映されて、オーケストラは大きく羽ばたいてきました。——そして、就任から4シーズン目となる今季、「歌」をテーマに素敵な作品たちを選んで旅している2022年度の折り返しとなる9月定期に、ふたたびモシユコフスキの作品を演奏するというのは、絶妙なタイミングといえましょう。

実は、次回定期でピアノ独奏をつとめる阪田知樹さん、CD化された(角田鋼亮 常任指揮者就任記念コンサート)のモシユコフスキを聴いて、ぜひ彼のピアノ協奏曲をいつか一緒にできたら!と念じておられたとか。ご縁が重なって、熱い夢が叶うのです。

◆溢れる情感、卓抜なスケルツォの花火、フィナーレの昂揚!

モーリッツ・モシユコフスキ(1854~1925)という名前は、ピアノ音楽にお詳しいかたには《花火》(火花とも)という小品などでも知られていましょうか。ポーランド系の作曲家で、若い頃から名ピアニストとしても大活躍。同時代の名手パデレフスキからも「モシユコフスキは、ショパン以降で最もピアノの書法をよく理解したひとで、彼の作品にはピアノ技法のあらゆる領域が含まれている」と賞賛されたほどの才能でした。

モシユコフスキは、生涯に2つのピアノ協奏曲を書いています。若い頃に書いた最初のピアノ協奏曲は、出版のチャンスを得られないまま埋もれてしまいました(2015年の世界初録音を聴くと、54分もの力作にみなぎる意欲にうたれます)が、経験を積んだのちに書いた2つ目のピアノ協奏曲[ホ長調 作品59/1898年]は熟練の傑作。これが、次回定期でお聴きいただく作品です。

魅力のポイントをいくつか挙げると——まず、溢れだし続ける情感が、豊かで明快なこと。その美しさをわかりやすく(しかし巧みな語り口で)聴き手の胸に注ぎ込んでくれる音楽です。聴いていてひたすら愉しいのは、華やかな技巧を尽くして走り、全身で躍るような独奏ピアノの大活躍(全曲ほぼ弾きっぱなしで、魅せ場ばかりです!)はもちろん、彼と共に色ゆたかな音世界を広げるオーケストラの響き、そのしなやかで雄弁な表現力もあってのことでしょう。

ノクターン(夜想曲)風の緩徐楽章も、さまざまな表情がみえて素敵ですし、卓抜なスケルツォ楽章の良きお祭り感と洒落た色彩美とを巧みに混ぜたような愉しい疾走は、モシユコフスキにしか書けない絶品。そして熱く盛り上がりすぎるフィナーレ……最近でこそ再発見され録音も増えてきたのですが、なぜ今まで埋もれていたのだろう?と不思議に思われることでしょう。

これだけの難しいソロを弾けるピアニストが稀であること、モシユコフスキをレパートリーに入れるオーケストラが少ないこと……名曲に蓋をしてきたそんな条件をクリアして挑む次回定期、必聴です。

◆傑作《火の鳥》の決定版! ——ロシアの歌と色彩美を濃縮した傑作組曲

モシユコフスキのピアノ協奏曲 ホ長調をお楽しみいただいた後は、ストラヴィンスキーの幻想美あふれる傑作バレエ音楽《火の鳥》(1910年初演)を、全曲からコンサート用に聴きやすく編み直した組曲版[1945年版]でお聴きいただきます。オーケストラの多彩な楽器、その表現力を知り尽くした作曲家が、楽器やその奏法の巧みな組み合わせで、驚くほどの色彩を引き出してみせる……匠のわざで聴く《夢の音絵巻》です。

むかしむかし——狩をしていた王子イワンは、とらえた火の鳥を助けた身代わりに、魔法の金の羽根をもらいます。イワンは、魔王カスチエイの城に囚われていた美しい王女に恋をして、金の羽根の力で魔王どもから救い出し……というお話。ロシア風のおとぎ話をバレエで魅せる本作、まだ作曲家としてデビューして間もない若いストラヴィンスキーが、鋭く冴えた才能で全力投球した音楽をつけました。

この全曲版は、ピットどころかステージからも溢れそうなほど大編成のオーケストラを駆使した、覇気あふれる傑作です。ロシア民謡を思わせるような美しい歌、大地を揺るがすような魔法のエネルギーを表現するサウンド……コンサートで全曲演奏されることも多いのですが、なにしろ大編成すぎて大変。そこでストラヴィンスキーは、楽器編成を小さくして、全曲から聴きどころを切りだした組曲版をつくりまします。いくつかあるなかで(1919年版組曲)が有名で、録音も多数あります。

ところがこの(1919年版組曲)、バレエをご覧になったことがあるかたなら「あれ、あの素敵なシーンがない……」と思われるはず。ちょっとだけ物足りないのです。そこでストラヴィンスキーは、演奏しやすい編成のまま、1919年版組曲で落としてしまったバレエの美味しいシーンも取り込み直した(1945年版組曲)というものを作り直します。

次回定期でお聴きいただくのは、この(1945年版組曲)です。よく演奏される(1919年版)にある人気曲はもちろんすべて入っているうえに、バレエ的な表現も美しい場面を取りこんで19年版より少し長くなり(約20分→約30分)聴きどころのバランスも良好。オーケストラの書法も練達の極みで、なにしろ愉しい傑作なのです。

有名な1919年版と比べれば、フィナーレの音の刻み方など明らかに違うところもあって、その変えた意味まで考えると面白いのですが……このあたり詳しくは『ONTOMO MOOK 究極のオーケストラ超名曲徹底解剖66』[音楽之友社、2010年]で、わたくしが担当した《火の鳥》の項目に書いておきましたので、図書館などでご覧いただければ。

次回定期では、モシユコフスキとストラヴィンスキーの色彩美をご堪能いただく前に、ロシア出身のセルゲイ・ラフマニノフ(1873~1943)が書いた絶品《ヴォカリーズ》もオーケストラ編曲版でお楽しみいただきます。もとは歌曲ですが、「あー」など母音だけで歌われるヴォカリーズ唱法の作品で、そもそも歌詞がありません。《火の鳥》と同じ頃、同じロシア出身の若い作曲家が書いた、しみじみと穏やかで深い詩情の世界は、続く2曲の昂揚の前に、心をととのえてくれるでしょう。

この夏もひきつづき、くれぐれもご自愛くださいますよう。そして9月にここでまた一緒に!

=====
山野雄大(やまの たけひろ)
ライター[音楽・舞踊評論]。『レコード芸術』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ・テレビ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CDライナーノートや企画構成、オーケストラやバレエ公演の解説など多数。
=====